魔族狩人　裟霧　～世界最強姉伝説～

静野月

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
魔族狩人　裟霧　～世界最強姉伝説～

【Ｎコード】
Ｎ１３０６Ｚ

【作者名】
静野月

【あらすじ】
僕の名前は東雲裟義理。高校生だけど、低級魔族を狩るハンターだ。お父さんとお母さんは、事情があり離れて暮らしているけど、僕には超アグレッシブな変人のお姉ちゃんがいて……。

傀儡

「裟霧（さぎり）、この世で一番怖いものは何だか知ってるかい？」
お姉ちゃんに聞かれ、僕は得意げに頷いた。
「うん、知ってるよ。悪魔でしょう？」
お姉ちゃんは「いいや」と首を横に振る。
「違うね。この世で一番怖いのは悪魔でも幽霊でもピストルでもないんだよ。この世で一番怖いのは人間さ」

子供の頃は、お姉ちゃんの言っていた事の意味が分からなかった。あまりにも漠然としていて、理解できなかった。
でも、今なら――――この状況なら、少し分かる気がする……。
「ちょっと、陽人（ようと）に馴れ馴れしくしないでよ！」
「あなたこそ、図々しいんじゃありません？！　陽人君を呼び捨てにするなんて、さすが知性の欠片もない巨乳をひけらかしているだけのことはありますわね！」
「なにおー！　この貧乳メガネ女！」
「お黙りなさい売女！！」
授業も終わった放課後、ゴミ捨てから戻ってきたら、クラスの女子が喧嘩を始めていた。僕は目を見開いてパチクリだ。
「な……なに？　これ……」
髪の毛を掴みあったり、平手で叩き合ったり、女子プロレス並みの乱闘だった。奇声を発し、他に残っていた数名の生徒もドン引きしている。
「さあ、突然始まったんだよ。俺にも何が起こったのかさっぱり」
僕の帰りを待っていた親友の根元広樹（ねもとひろき）がお手上げのポーズを作った。なんでも、掃除の時間が終わった直後、突然、何の前触れもなく始まったらしい。

「ちょ、ちょっと止めなよ。片倉さんも渡部さんも仲良かったじゃない」
喧嘩を止めに入ったら、
「うるさい包茎！」
「童貞のあなたには関係ないことです」
と、言葉のナイフをグサグサ刺される。
「……広樹ぃ、どーして、彼女達、僕の秘密を知ってるんだろう」
がっくりと広樹の所まで戻った僕は涙目だ。
「うわ、酷い言われよう。つーか、秘密だったのか。というかどうせ当てずっぽうに言われただけなんだから、そこまで落ち込むな。まー、放っておけば。俺達関係ないし」
「でも、女の子同志で取っ組み合いの喧嘩だなんて……」
「お前、また止めにいったら、さっきよりも酷いこと言われるぞ」
「そ、それはヤだな……」
二人の喧嘩はまだ続いている。
「いい？　陽人は私と付き合うの！」
「いいえ、陽人君は、私とお付き合いするのです」
僕はさっきから、ずっと二人が取り合っている『陽人』が気になっていた。もう、カバンを抱えて教室を出ようとしている広樹を引き止める。
「ねぇ、さっきから陽人って人を取り合ってるみたいだけど、誰？　うちの学校じゃないよね？」
「いんや、うちの学校。しかもうちのクラス」
「へ？」
「あれ」
広樹が一点に指を差す。その先に座っているのは、クラスメイトの小津君だ。
「え”？　……小津君？」
「いかにも」
ちょっと意外でびっくりする。申し訳ないけど、小津は、女の子

たちが取り合うようなキャラじゃないからだ。
「何がいーんだか、うちの高校1巨乳の美少女渡部加奈子ちゃんと、うちの高校1清楚な知的美少女の片倉由佳ちゃんが、よりにもよって『ガマガエル』を取り合ってるってぇわけよ」
小津君とはほとんど話したことないけど、以前に他の子とやっぱ女の子は二次元だよなーみたいな会話をしているのを聞いたことがある。にきび面で肩にフケが溜まっていても気にしない不潔なタイプだから、当然のように女の子からも避けられていてモテるという話も聞いたことがなかった。おまけに背が低く、太っているので女の子たちから付けられたあだ名は『ガマガエル』だ。
その小津君を、我が高校代表とも言える美少女二人が取り合うなんて、青天の霹靂だ。
「うわ……裟霧、その正直な顔やめろ」
「う、顔に出てた？」
僕は、無意識に変顔していたらしい。
「信じられないって書いてあるぞ」
でも、僕の疑問はもっともだと思う。一体、この三人に何が起こったのか超気になる。
「だって、だってだよ？　小津君と言えば、キモイ、ダサい、臭いで女子から嫌われてたじゃない」
「お前、正直も通り越すと失礼だぞ」
「それに小津君の目つき、男の僕が見たって気味悪いっていうか気色悪いって言うか」
「気味悪いも気色悪いも同じ意味だな」
――――やっぱり、変だ。嫌な胸騒ぎがする。
これは……。
僕は、小津君に向けて目を細めた。
「きゃあああああっ！」
「いてっ」
片倉さんに張り飛ばされ、渡部さんが吹っ飛んでくる。そのまま、

僕は下敷きにされ床に体を打ちつけた。
「おい、大丈夫か？　裟霧」
「いてーーーーーーーーーーっ」
うつぶせになった僕の腰の位置に座りながら、渡部さんが悪態をつく。
「うるせぇな子供（ガキ）！　そんなトコにボーっと突っ立ってんじゃねーよ！」
広樹が、僕の顔の近くで座り込んだ。
「散々だな。でも、そんなに痛がるなんてちょいオーバーっつーか、加奈子のケツに敷かれるなんて、ちょっとラッキーだぞ」
僕は、その痛みに顔を顰めている。
上に乗っかられて痛いのではない。
この肌をピリピリと差すような痛み。そして、気持ち悪くなりそうな不快な感触は……！
「ち、ちがっ……この感じは……」
僕の上から立ち上がった渡部さんの背中に、ズボンのポケットから取り出した小瓶の中身をぶちまけた。
「渡部さん、ごめん！」
「うぎゃあああああああああああっ！」
渡部さんの背中から、プスプスと黒い煙が立ち昇る。まるで危険な薬品がかかったかのように、苦しげに暴れ始めた。
「あ、熱い……！　い、痛い……嫌だ……怖い……」
渡部さんが白目を剥いて気絶する。
「お、おい！　ちょ、何ぶっかけてんの？！」
広樹が慌てるのも無理なかった。僕だって、こんなに苦しがるとは思っていなかったからだ。
「ザマーミロですわ。東雲君、淫乱女退治ご苦労さまです」
片倉さんが、高笑いしながら小津君と腕を組む。
「これは聖水だよ。渡部さん、何者かに操られてる」
「は、はぁ？！」

「恐らく、片倉さんも」
「どういうことだ?・!」

低魔

この世界は、結構複雑だ。
科学じゃ説明できないようなモノが確かに存在するし、人の世に闊歩している。
僕らは、そいつらのことを『魔族』と呼んでいた。『魔』から生まれた生き物だからだ。

「これ、傀儡の術だよ。恐らく、仕掛けた奴が近くにいる」
キョロキョロと教室を見渡すと、広樹がしれっと答えた。
「んじゃ、小津だろ」
「なんで？」
「すげー勢いで、教室から出てったから」
確かに、一番怪しいのは小津君だ。渡部さんは聖水をかけられて、そのまま床で気を失っているが、小津君と片倉さんの姿が消えていた。
「ちょ、追いかけないと！」
二人を追い、勢い良く教室を出て廊下を走る。
「おい、待てよ！　俺も一緒に行くって」
なぜか、後ろから広樹まで追いかけてきた。
「危ないから広樹は教室で待っててよ」
「やだね。なんか楽しそうじゃん」
能天気に言われ、僕は、眉をぎゅっと眉間に寄せる。
「全然、楽しくなんてないよ。あれは、ロウ・デーモンだ」
「ろーでーもん？」
「うん。低級の魔族は、ちゃんと契約しないで人間に憑依するから見つけにくいんだ。魔力も低いしね」
「ふーん。でも、俺、オカルト的なのって一切ダメなんだよね」

「んじゃ聞かないでよ。つか、ホント、危ないから着いて来ないでよ！」
「着いてくんなって言われれば、行きたくなるのが人のサガってモンでしょ。それにさぁ、ちょっと意外。童貞で童顔の裟霧がオカルトマニアだったとはねぇ」
悔しいけど、これが一般人の反応だ。
でも魔族はいる。恐らく、小津君は低級魔族（ロウ・デーモン）に憑依されている。
それに、
「オカルトマニアと、童貞と童顔は激しく関係ないと思うけど。僕、童顔も気にしてたのに……」
「いーじゃん。裟霧は、そこらの女より全然可愛いよ」
「……」
上から吹き降りてくる風から、微量の魔力を感じ取った。
「こっちか」
屋上に続く階段を全速力で駆け上る。

「くそっ！　着いてくんな！！」
――――やっぱり、屋上に小津君はいた。隣に片倉さんもいる。
「小津君、しっかりして！　君は低級の魔族に取り憑かれてるんだ！」
「うるせぇ！　俺は神になったんだ！　世界中の美少女は俺のモンだ！」
「……うわぁ。なんか、俺、小津が可愛そうになっちゃった」
後ろから着いてきた広樹が目を半目にする。
「そんな魔力じゃ、世界中の美少女でハーレムなんて無理だよ。せいぜい二、三人」
「二、三人でもいーんだよ！　お前らの憧れの的の美少女二人が手に入ったんだからな！」
「渡部さんの傀儡の術はもう解けてるよ。片倉さんにかけたのだって、せいぜい一日くらいしか持たないよ。それに小津君、それ以上、

魔族を憑依させたままにしてたら『魔族堕ち』しちゃうよ？！」
「おい、魔族堕ちってなんだ？」
広樹に聞かれ、仕方なく答える。
「魔族っていうのは、生物を媒体としないと実体化できないんだ。だから憑依して、魂や精神を乗っ取っていく。全て吸われた人間は、自我を失って魔族に体を明け渡しちゃうんだ。そうなった人間は、もう人とみなされずに『魔族堕ち』って言って処分の対象になれる」
「なるほどね。話の筋は通ってるみたいね」
「んもう、信用してないんなら、あまり聞かないでよ。僕、忙しいんだから」
「あー、ええっと、もう一個。処分って……殺すってこと？」
広樹の質問に、胸がギクリとなった。
正直、それが正解だ。
魔族堕ちした人間は、殺される。そして、それが東雲一族、僕の属する一族の生業だ。
「あっ、ええっと、そ、そそそそ、それは、そのぉ……」
言いたくなくて言葉に詰まる。だって、この世界では、それを『人殺し』という。いくら中身が魔族と取り変わっていたとしてもだ。
「俺は、そんな脅しきかないぞー！　人間なんて全然怖くないしぃ。俺のことをバカにしてた女どもも、みんな奴隷だ！」
「んー、なんか同情しちゃうね。俺は可哀相で小津が正視できないよ」
「うるせー！　根元！　お前は殺してやる！！」
「ま、待った！　ダメだよ！　それ以上、魔力を使っちゃ！！」
「東雲はともかく、俺は根元みたいなイケメンでカッコ良くて女にモテる男が大嫌いなんだ！！」
広樹に煽られ、小津君が怒り狂ったように黒い煙を体から立ち上らせた。
「東雲はともかくっていうのが気になるけど、僕は、もうこれ以上、君に魔力を使わせないからね！」

左手の拳を握って目の前に突き出す。
「ヴァジェラ！！」
握った拳から、真紅の炎が燃え盛った。炎は柄を作り左右に槍状の刃を形どる。
「な……なんだ？！」
さすがに、広樹も面食らっている。握った拳から炎を出し、何もなかった空間から武器が出てきたら、手品みたいに見えることだろう。
「これは『独鈷杵（どっこしょ）』。僕たち、東雲一族は『退魔具』を召還できるんだ」
一メートル近くにも成長したヴァジェラを、くるっとバトンのように三回転させた。聖なる炎が苦しいのか、小津君が顔を歪めて後ずさる。
「陽人君逃げて！」
片倉さんが、小津君を庇うように立ちはだかった。
「どいて！　片倉さんも、お願いだから正気に戻って！」
魔族に憑依されたり術をかけられるのは、心に隙があるからだ。気を強く保てばかからないし、自分で解くことも可能である。
「片倉さん、こっちにおいで」
広樹が、ぱーっと両手を広げた。
「うっ……根元君……」
片倉さんが、小津君と広樹を交互に見つめ、広樹の方に走っていく。
「根元くーん」
「はい、キャッチ」
広樹が片倉さんを抱きかかえた。悔しいけど、術が解けたようだ。
「ぐ……ぐそぉおぉぉぉぉぉおおおおお！！」
小津君が怒りの魔力を滾らせた。体中から黒い煙が放出し、邪悪な魔力をまとって僕に襲い掛かってくる。
「だ、ダメだ！　小津君！」

僕は切りかかることなんてできない。ここには広樹もいるし、片倉さんもいる。それに、小津君はクラスメイトだ。魔力を使ってちょっと悪戯したみたいだけど、殺すほどの悪さはしていない。それなのに――――。

悪魔堕ちすれば、死が待っている。僕が見逃しても、他の誰かが殺してしまう。

「ぎゃーーーーーーっはっはーっ！　逃げ回ることしかできねーじゃん！　弱えーのにしゃしゃり出てくんな、バーカ！」

「くっ……」

黒煙がナイフの刃のように、襲い掛かってきた。ヴァジェラで叩き落したが、数が多い。

「つっ……」

刃の一つが肩を貫いた。実態は無い物だが、退魔具と同じ原理で人に触れれば普通に傷がつく。

「きゃーーーーーーーーっ！」

片倉さんが悲鳴を上げる。

僕の右肩から、どくどくと赤い血が噴出した。

「東雲君、そのキモ変態ぶ男をさっさと殺しちゃって！！」

そう叫んだのは片倉さんだ。

「ほんっと、そいつ気持ち悪い。私に変な催眠術かけて、いやらしいことしようとしてたんでしょう？！　早く死ねばいいんだわ！」

「ちょ、止めて！　これ以上怒らせたら、小津君が悪魔堕ちする！」

「……マジ、三次元の女なんて死に絶えればいいのに」

小津君が、ゴゴゴと唸りを上げて黒い煙に包まれた。眼球が真っ赤に染まり、口が裂けて背中から蝙蝠のような羽が生える。

「小津君……」

「グギャアアアアアアアアアアアアアッ！」

奇声と共に、黒い糸のようなものが無数に飛んできた。体を絡めとられ、自由を失う。

「しまった……これじゃヴァジェラが使えない……」

体中を、ものすごい力で締め付けられる。骨が軋み、ゴリっという嫌な音がした。
「裟霧！！」
近寄ろうとした広樹を止める。
「広樹！　片倉さんを連れて逃げて！！」
本当は殺したくない。まだ可能性があるなら助けたい。小津君に、まだ心があるなら。
ごふっと血を吐いた。肋骨が折れたかもしれない。
でも、このままじゃ……やられる……。

ドーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーン！！

その爆風と共に、体を拘束していた糸が解けた。
ぜえぜえと肩で荒い息をしながら、小津君の姿を確認する。
「小津君……！」
彼の体は吹き飛ばされ、給水棟のコンクリートにめり込んでいた。
「だっ、誰だ！！」

「お前は殺す」

僕は、その声でびくっと首だけ反転させた。

お姉ちゃん登場

腰まで届く長い黒髪、切れ長の瞳に細い顎、すらりとした長身の体系。そして、左手に炎が燃え滾った剣を握っているその姿は紛れもない。

「お姉ちゃん……」

「このクソ魔族、私の裟霧（さぎり）を傷つけた罪は重いよ」

お姉ちゃんが『阿修羅』を振りかざした。その緩慢な動作だけで、一帯の魔力が飛び散って祓われる。

「うわ、裟霧に、こんな美人のお姉さんがいたなんて、俺、知らなかった……」

「ちょ、広樹（ひろき）、まだいたの?！　逃げてって言ったでしょ！」

「うん、逃げようと思ったけど止めた。片倉さんは、とっとと逃げたから大丈夫だよ。それよりもさー、裟霧、お姉さんに紹介してよー。俺、裟霧の親友の根元広樹って言いま〜す！　現在１７歳、独身で〜す！」

広樹はガン無視で（当たり前だけど）お姉ちゃんは小津君ともども魔族を退治する気満々だ。

「お姉ちゃん、小津君は助けてあげて！　お願い！」

「裟霧なら分かるだろう。これはもう『人』じゃない」

うっ……と言葉を詰まらせる。メタモルフォーゼしてしまった実体は人には戻れない……それが定説だ。

「それに、分かってるだろう？　裟霧を傷つけたモノは人だって、殺すよ」

お姉ちゃんの瞳がぎらっと輝く。

「うわ、お姉さん超絶美人だけど、超絶コエー、でもそこがイイネ！」

「んもう、広樹も黙ってよ！　小津君が殺されちゃうかもしれないんだよ?！」
広樹が、急に真顔に戻る。
「ああ、分かってるよ。でも、もう元の小津には戻れないんだろう？　だったら、あのまま生かしておくのも可哀相じゃないか？」
真っ赤な瞳、犬歯のような歯をむき出しにした裂けた口、黒い羽。
もう、小津君は人の形をしていなかった。
もう、手遅れになってしまった。

「ギャシャアアアアアアアアアアアアアアアアアッ！」
小津君が、お姉ちゃんに飛び掛る。
「斬」
一閃で小津君は倒された。

「裟霧、そして、そこの坊やもよく聞きな。これが東雲一族の仕事。魔族狩りだ」

「分かってる。分かってるけど、でも、それでも助けたかったんだ……」
「裟霧……」
広樹にポンと肩を叩かれる。

僕はその時、泣いていたかもしれない。

「しかし、裟霧に、あんな秘密があったとはねぇ……」
翌日、小津君の机には白い花が飾られた。
僕は、その花を直視することができなかった。

「おい、お前がいつまでも落ち込んでても仕方ないじゃないか」
広樹に励まされても、僕は俯いたまま顔を上げれない。
「そうなんだけど……」

「あー、ほんっと、あのキモ男が死んでくれて良かったよねー」
「私達に変な催眠術なんてかけるからバチが当たったんですわ」
「あは。いえてるー」
片倉さんと渡部さんが、楽しそうに笑ってる。
僕は、がたっと音を立てながら席を立った。
「おい、裟霧……」

「渡部さん、片倉さん、もう止めてください」
「は、はあ？　何言ってんのいきなり」
「東雲君、あんな下衆の死を悲しむことはありませんよ。あの人はいらない人間。ゴミだっただけですわ」
バン！　と机を叩いた。二人が驚いて黙り込む。

「おい、裟霧」
広樹に肩をつかまれ、教室を出る。
廊下を歩きながら、隣を歩く長身の男を見上げる。
「なあ、広樹。この世で一番怖いものは何だか知ってる？」
唐突に質問をすると、広樹が真顔で答えた。
「ああ、知ってるよ。人間だろ？」

『魔』は人から生まれる。
心に隙があれば、いつでも人は魔に堕ちるのだ――――。

東雲家の日常

「なあ、お姉さんの名前は？」
「東雲雪花（しののめせっか）」
「んじゃ、年齢は？　誕生日は？　血液型は？　スリーサイズは？」
「……四歳上だから二十一歳。んで、そんなにお姉ちゃんのことを聞いてどうするの？」
「どうするって、そりゃー知りたくもなるだろ。あんな綺麗な人、見たことないぞ」
　この、必死にメモを取っている友人は根元広樹（ねもとひろき）。カッコいいし女子に超モテるのに、どこか残念な親友だ。
「でも、広樹は本性みたでしょ？　お姉ちゃん、怒ると悪魔よりも怖いよ？」
「あの、いかにもボンテージファッションと蝋燭とムチが似合いそうな感じがいいんだヨ。あー雪花さん、ハイヒール履いて俺を踏んでくれないかなぁ」
「……」

　僕のお姉ちゃんは、弟の僕から見ても美人だとは思う。でも、キレたら手がつけられない一族最強の魔族ハンターだ。
　実は……僕はまだ見習いなんだけど、お姉ちゃんは政府からの指令を受けて仕事を引き受けていた。
「裟霧、お姉ちゃん、ちょっと三日ほど仕事で家を開けるから」
「うん、分かったよ。気をつけて行って来てね」
「裟霧〜」
　むぎゅうっと抱きしめられる。胸を押し付けられて、僕は窒息死寸前だ。

「ぐ、ぐるじぃ……」
「お土産買ってくるからね。良い子にして待っててね」
ぶちゅーっと唇にキスされる。子供の頃は、まったく気が付かなかったが、お姉ちゃんはちょっとおかしいらしい。ブラコンなんて可愛い感じじゃなくて、ちょっと病的に僕に構ってくる。
「あっ、そういえば、なんでこの前、僕が小津君に襲われてたのが分かったの？！」
「あー……」
お姉ちゃんが、言葉に詰まるなんて最高に怪しい。
「愛よ。愛。お姉ちゃんの愛が、裟霧のピンチをピピっと感じ取ったの」
「……また、僕に気づかれないように盗聴器つけたでしょう？　どこに付けたの？！　携帯電話？　時計？　生徒手帳？！」
お姉ちゃんが、ニヤリと三日月型に口角を上げた。
「そんな、直ぐに発見されるようなトコにつけるわけないじゃない」
……どうやら、想像を軽く超えているところに付けたらしい。
「もうヤダよ！　止めてよ！　僕にプライバシーはないの？！」
「ない」
と、きっぱりと断言される。
「おかしいよ！　いくら姉弟（キョウダイ）でも、盗聴器なんてやりすぎだよ！」
「んじゃ、この前みたいに裟霧に危険が及んだらどーすんの？　お姉ちゃん、心配でおちおち仕事にも行けなくなっちゃうよ？」
「ぼ……僕だって、もう子供じゃないんだ。自分の身くらい自分で守るよ」
「……殺されそうになったクセに」
ドキ。
「器がクラスメイトだからって、手も出せなかったクセに」
ドキドキドキ。
「あっ……あれは……、僕はどうしても小津君を助けたくって……」
お姉ちゃんが、ふーっと深い溜息を吐く。

「まあ、私は、そんなお人好しの裟霧が好きなんだけどね。でも、またこの間みたいな目に会ったら、あんた死ぬよ？」
拳をぎゅっと握る。僕は、たぶん一族で一番弱い。そして、クラスメイトさえも助けてあげることができなかった。
「魔は、どこにでも存在していて、いつでも人を襲う。だからね、お姉ちゃんが心配するのも分かっておくれ」
「……でも、盗聴器はやりすぎ。なんか、緊急ブザーみたいなものにしようよ。危険を知らせる特殊な警報装置みたいなやつ」
「ふーん、そんなにお姉ちゃんに知られたくないことがあるんだ」
「当たり前ジャン！　僕だって、人に知られたくないことくらいあるよ！」
切れ長の瞳でじーっと見下ろされる。
「……まあ、身長は伸びないし童顔で中学生みたいだけど、一応年頃の男の子だしね。仕方ないか」
「お姉ちゃん、一言余計だよ！　つか、お姉ちゃんは何でそんなに背が高いのに僕が伸びないのさ！」
「さあ？　これから伸びるんじゃない？　私は今でも少しづつ伸びてるけど」
「……」
神様は意地悪だ。
お姉ちゃんは１７５センチもあるのに、僕は１６０センチしかない。
「大丈夫だよ、裟霧。男の子は、まだまだこれから伸びるんだから」
子供のように頭をナデナデされる。お姉ちゃんにとって、僕はまだ幼稚園児みたいなものらしく、いつまで経っても態度が変わらない。

「へぇ。んで、盗聴器は外してもらえたの？」

「うん。最後までどこにつけたか白状しなかったけど。たぶん、取ってくれたと思う」
「チッ。それ、俺、欲しかったな」
「広樹が何に使うの？」
「ふふっ」
その満面の笑みで、その先は聞くのを止めた。きっといかがわしいことに違いないから。
「でも、裟霧が今まで家族の話しほとんどしなかったのも分かったし。なんか俺は嬉しいかも」
「そ……そう？」
「あーあ、雪花さん、弟の代わりに俺を溺愛してくれないかなーって、あ、そうだ！　肝心なコト聞くの忘れてた！」
「な、なに？」
「そ、その……彼氏いるのかな？」
「あー……」
ヤバい。これだけは絶対に言えない。
「どうしたの？　裟霧、体が震えてるけど」

「雪花さん、お願いします！　僕と付き合ってください」
「えー、嫌」
「何でもします！　何でも言うコト聞きますから！」
「私、裟霧以外の男に興味ないから」
「さ……裟霧さんて、確か実の弟さんでは……」
「だから何？」
思い出すだけでも恐ろしい会話だ。でもお姉ちゃんはいつも平然と口走る。そして、硬質の美貌と呼ばれるだけに、常にポーカーフェイスだからどこまでが冗談なんだかよく分からない。
「冗談のわけないじゃん。本気だけど？」

「あ、あの……でも、その、僕とは……つまり……」
「あー、もしかして一回やったくらいで本気になっちゃった？」
お姉ちゃんは鬼畜だ。きっと男の敵だ。
「残念だけど、私、遊び以外の付き合いしないから。はい、あんたの番号携帯電話から消去っと」
いつか刺されると言われそうだけど、そんな猛者は地球上に存在していないだろう。

これが僕のお姉ちゃん、東雲雪花です。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1306z/

魔族狩人　裟霧　～世界最強姉伝説～

2011年12月5日00時07分発行